

一読総合法の指導を実践して

「予想・見通し」、「感想・意見だし」について

教材 大きなしらかば（5年 東書）

足利市立山辺小学校 大塚 晴雄

一読総合法の読みの作業の中には書き込み、関係づけなどいくつかあるが、その中の「予想、見通し」、「感想、意見だし」について実践した記録を次に書いてみる。

予想、見通しについて

「予想、見通し」は読みはじめと同時に展開され、読み進めていく過程で修正、拡充されながら行なわれる。これらは

- (1) 題名からの予想、見通し
- (2) 立ちどまりの中における予想、見通し

大別される。

(1) 題名からの予想、見通し

文章を読む場合、まず文題をみる。文題をみただけで、語と語の関係、過去の経験などから予想を立てることができる。題名を見てどんな物語であるかなど、この予想をたててみるのは楽しいものであるたとえ、その予想がばく然としたものであったり、思いつきであったりして、内容と全く違うものであっても、題名に対して意図的に注意を向けさせることにより、作品への期待が生まれ、関心興味がつながるるのである。

(2) 立ちどまりの中における予想、見通し

これは、前出の「題名からの予想、見通し」と異なり、読み進められていく途中の「立ちどまり」における「予想、見通し」である。すなはち作者の意図や文章全体にもられている主題・情調を考え一環としてあらわされる。

物語を読む場合、子どもたちの興味・関心はなんといっても「この先どうするのか。」「どうなる。」を自分のことのように心配し、期待し、はらはらしながら読み進めるにある。

ある時は登場する人、物と共に鳴したり、反発したり、感服したり、ともに喜び、悲しみ、驚いたりする。だが、真の読みや、真の興味がわくためには、決して、安直な予想や思いつきだけの見通しではならない。読み進める途中で、いつも表現を的確におさえて、話の展開するすじも、人・物のおれた環境やその行動の経過もおさえなければならない。

こうしてたてられた「予想、見通し」が、はたしてその通り実現されるかどうかは、文章を読むことによって確かめられる。予想した通りであれば、強い感動として確認され、相違すれば、新しいもう一つの見方、考え方を教えてられ、自分の視野がひらけてくる。また、ある場合は、考へてもいなかつたことが問題にされたり、かくれていたものが明かるみに出されたりして、その後の読みをいっそう明確にする。

感想、意見だしについて

文学作品の指導における感想、意見という言語行為は、ただ、それだけが独立して存在し得るものではない。「表象形成」、「関係づけ」、「話しかえ」などの言語行為と結合して、はじめて成立するものである。文章表現が正しく理解されないでは、正しい感想も意見も生まれてこないのである。

そして、感想・意見というものは、文章を最後まで読まなければ何も言えないといいう固定的なものなく、読み進める過程で、否定・肯定や疑問といいうものが意識されてくる。ただ、その意識の流れ

は、文のはじめから修正されずに、文章末に到達するものと、修正がくりかえし行なわれるものがある。主題や作品の基本思想についても、読み進めるにしたがって、だいぶふくらみをもって読み手に伝わってくるものである。

実践

次に、「大きなしらかば」(5年)の授業記録を書いてみよう。

(1) 題名からの予想、見通し

①大きなしらかばの木の枝を折って、持ち主にしかられる物語だと思います。

②大きなしらかばの木の下で、なかのよい兄弟が小屋をたててくらし、いろいろな事件がおこる物語だと思います。

③小さなしらかばの木が大きくなっていくようすが書いてある物語だと思います。

④外国の物語なら、シベリアとかカナダとかの寒い国の物語だと思います。

◇題名からの予想として、①は子どもらしく、自分たちの身近におこりそうな単純なもの、②は5年教材で既習の「フリチョフ・ナンセン」の内容に結びつけて予想し、③は「しらかば」に焦点をあてて、その成長していく過程を物語にしているとし、④は「しらかば」の生育している国を予想している。

これらの予想は、本文にはいれば当然修正されるが、意識的に題名に対し注意を向け、期待をもって読み進めるみちびきの役割をはたせばよいわけである。

(2) 予想・見通し・感想・意見だし

教材文の中のⒶⒷ……の文については、後で児童の「感想・意見だし」が書いてある。

「おい、アリョーシャ。」

と、ボロージャが言いました。

Ⓐ 「おまえは、あの大きなしらかばには登れないだろうな。」

「ぼくは、登りたいんだけどな。」

アリョーシャは、まゆをしかめて答えました。

Ⓑ 「でも、許してくれないんだ、おかあさんが。[◎]登るよりも、おりるほうがずっとむずかしいって言うんだ。」

① 「へーん。おまえっ子。」

ボロージャは、くつをぬいで、そのしらかばのそばにある、高い切りかぶの上にとび上がるとき手足で幹をだきかかえるようにして、登りはじめました。

Ⓐ相手をばかにしている言いかただ。

Ⓑおかあさんはきびしい人だろう。

・アリョーシャがけがをしたらたいへんだから言ったのだ。

①ぼくの経験でも、のぼるより、おりるほうがむずかしかった。(他の児童多数同意見)

②日本人の子と同じようないいかただ。

じぶんが登れるからばかりにしているのだ。

ボロージャはいじめっ子だ。

ここで意外に思ったことは、アリョーシャとボロージャは兄弟ではないか、ということ。これには反対意見もあつたが、

よびすてにしているから、ボロージャが兄ではないか。

兄のボロージャは、いつもおかあさんにあまえているアリョーシャをからかっているのだ。

アリョーシャは弟だからよびすてにされているのだ。

外国の物語には、よく呼びすてにしていることがあるからわからない。

など、いろいろ意見がでたが読み進めていくうちに解決するだろうということでそのままにした。

◇予想・見通し

・ボロージャは足をすべらして落ち、けがをする。

ボロージャは、いちばん上まで登っておりられなくなる。

・ボロージャが木から落ちて、アリョーシャの言ったことがほんとうになる。

○このたんらくでは、まだたくさんの予想が発表されて、事件の発展への意欲的な姿勢が形成された。

④ アリョーシャは、うらやましそうに見ていました。^⑤ 緑にしげったえだけは、まるで空にもとどき
そうな、いちばん高い所にだけついていて、幹はほとんどなめらかです。ところどころに、こぶ
や、古いえだの折れたあとがあるだけです。そして、地面からずっと上方で二つに分かれてしま
り、^⑥ そのまっ白ですらりとした二つの幹は、両方とも、^⑦ 空に向かってまっすぐのびていました。
ボロージャは、もう、その分かれめの所まで登って、足をぶらぶらさせながら、こしかけてい
ました。

「ぼくの所まで登って来い。あまえっ子。」

⑧ ボロージャは、からかうのをやめません。

「えだがないから登れないんだろう。こわいんだな。」

「ちがうよ。」

⑨ アリョーシャは、こらえきれなくなりました。

「ぼくは、学校の登りぼうの半分まで登れるんだよ。」

「どうして、たった半分までなんだい。おかあさんのお許しがないのかい。」

アリョーシャは、ふくれつらをして、庭のずっとなれたすみの方にひっこんでしまいました。

ボロージャは、なおしばらく、しらかばの上にこしかけていました。でも、からかう相手はもういません。といって、^⑩ すべすべした幹を、もっと上方にまで登って行く決心もつかなかったのです。ボロージャは、地面において、うちへ帰って行きました。

⑪ おかあさん許してくれたら登ってやるのにという気持ちだろ。

⑫ 春か夏だろ。

⑬ 高い木だな。

- ・すごく大きな木だろう。
- ①スマートだろうな。
- ⑩「ジャックとまめの木」の空に向かってのびたまめの木みたいだ。
- ⑪「もう」というのだから、ボロージャは、登るのがはやくてうまいんだろう。
- ⑫ボロージャは、いやがらせばかりしていて、いやな子だ。
- ・こんなにしつっこくからかうのだから、自分は、あまえる親がいないのだろう。きっと、みなしこかもしない。
- ⑬いまにものぼってやりたい気持ちだろう。
- ・のぼりだすのではないか。
- ⑭「お許し」の「お」は、ていねいな言いかたにしてはおかしい。わざと言っているのだろう。
 - ・アリョーシャをばかにしているよう。アリョーシャはくやしいだろう。
 - ・ボロージャは、アリョーシャがのぼって来ないと思って、こんな言い方をしている。
- ⑮すべすべした幹だから、これ以上登るのがこわいのだろう。
- ・からかう相手がいないから、登ってもはりあいがないのだろう。
- ⑯ここで、「大きなしらかば」は、どんな木だろうか話し合うと
- ・空にもとどきそうなと言うのだから、そうとう高い木だろう。
- ・「幹はほとんどなめらかです。」と書いてあるから、そうとう登りづらい木だ。
- ・ボロージャが登ってじまんするのだから、ふたりの住んでいるあたりでいちばん高いんだろう。
- ⑰次に、ふたりの人がらと年令はどのくらいだろうかということが問題になった。
- 人がら
 - ・ボロージャ
なまいきで、むこうみずな子。強そうな子。木の上から、からかうなんてひきょうな子。
 - ・アリョーシャ
親の言うことをよく聞くすなおな子。気の弱い子。いくじなし。
- ふたりの年令
 - ・アリョーシャは、のぼりぼうの半分ぐらいまでしか登れないんだから、日本の子と同じにみて、小学二年生ぐらいだろう。
 - ・「小さいんだから」と言っているから一、二年生だろう。
 - ・会話のところで、話しぶりから、二、三年生ぐらい
 - ・ボロージャは、アリョーシャより一つか二つ上だと思う。
- ◇予想、見通し
 - ・アリョーシャは、おかあさんに言われたとおり、じっと、がまんして登らない。
 - ・アリョーシャは、ボロージャにからかわれてくやしくなり、おかあさんにないしょで、木に登るだろう。
 - ・アリョーシャは、庭のすみのほうで考えたすえ、だれもいないときに登るだろう。
- ⑱アリョーシャの今後の行動について関心をもっている。それは、アリョーシャをいたわる気持ちか

る、あるいは応えんする気持ち、弱い者へ味方する気持ちにつながる。

④庭にひとり残ったアリョーシャは、また大きなしらかばの木に近寄りました。^⑤あたりを見回しましたが、だれも見えません。アリョーシャは、古いえだの折れたあとに足をかけ、こぶの一つ一つにつかまりながら、登り始めました。下の方の幹は、あんまり太くて、足でかかえこむことができないです。

⑥「ボロージャはいいなあ、足が長くて。」と、アリョーシャは、^①はらだたしく思いました。

⑦「でも、ぼくは、ボロージャよりもっと高く登ってやるぞ。」

そして、^⑧もっと高く、もっと高く、だんだん登って行きました。木は、下から見て感じられたほど、なめらかではありませんでした。手をかける所も、足をのせる所もありました。もう少しもうちょっと、……。そうすれば、分かれめにとどくことができるでしょう。そこで、ひと休みすることができます。

そら、登りつきました。アリョーシャは、さっきボロージャがしていたように木の分かれめの所に馬乗りになって休みました。しかし、^⑨いつまでも休んではいられません。^⑩だれも来ないうちに、てっぺんまで登ってみなければならないのです。アリョーシャは、^⑪立ち上がって、上方を^⑫見上げました。右の幹は左のより高くのびています。アリョーシャは、^⑬高いほうを選ぶと、^⑭手と足で幹をかかえこんで、登りぼうを登るようにして、登りました。

⑪家に帰らないで、だれも見ていかなかったら、登ろうと考えていたんだ。

⑫どうぼうが、しのびこむときのような動作だね。

⑬ふつうの言いかたは、「ボロージャは足が長くていいなあ。」と言います。言いたいことを先にこのようにことばの順をかえるのだと思う。前にも出ていた。「でも、許してくれないんだ、おかあさんが。」というところ。

⑭じぶんの足が短いのはらだたしく思っているのだろう。

⑮ボロージャにからかわれたのが、よほどくやしかったのだろう。

・前に、アリョーシャ気が弱いと言ったけど、そうでないな。まけずきらいだ。

・アリョーシャは、登れるかどうか、ためしてみたかったのだと思う。

⑯おかあさんに言わされたことを忘れてしまったのかな。

⑰おかあさんが来たら困るのだろう。

⑲アリョーシャは、心の底から登ってみたかったのだ。

⑳高く登りたいからだろう。

・ボロージャよりも高く登ってやるんだという気持ちだろう。

・アリョーシャは勇気がある。

㉑手と足でかかえこめるのだから、前の「下の方の幹」より細くなっている。(関係づけ)

㉒児童の多くが予想していた通り、アリョーシャは木に登りだしてしまった。ボロージャにからかわれっぱなしのアリョーシャでは物足りなかった。だから、ボロージャの力に挑戦した勇気に共

鳴しているようす。一方、母のいいつつにそむいた行動に批判的な児童もいた。この部分で、素直で気の弱いアリョーシャから、負けすぎらいで、勇気のあるアリョーシャへとうつっていくこと児童は目をみはっているようだ。

◇予想・見通し

- ・アリョーシャは、てっぺんまで登って落ちそうになる。
- ・アリョーシャは、てっぺんまで登って、しばらくあたりの美しいけしきに見とれている。
- ・ボロージャに見つかってしまう。
- ・アリョーシャは、上方まで登っておりられなくなり、おかあさんの言ったことばが身にしみてわかる。

(中略)

アリョーシャのおかあさんは、台所で、かたに大きなふきんをかけて、茶わんをふいていました。
とつぜん、あけひろげたまどに、ボロージャのおびえた顔が現われました。

「ジーナおばさん、ジーナおばさん。」

と、ボロージャは大声でよびました。

「どうしたの。」

①「おばさんとこのアリョーシャが、大きなしらかばの木に登ったんだ。落ちるかもしれないよ。」

茶わんは、おかあさんの手からすべり落ち、ゆかにくだけて、音をたてました。

「どのしらかばに。」

「大きいのだよ。木戸のむこうの。」

②「おかあさんは、台所からとび出し、木戸の外へ走りだしました。」

「どこ。」

「ほら、あそこだよ。あのしらかば。」

③「おかあさんは、白い幹の二つに分かれているあたりを見上げました。アリョーシャのすがたは見えません。」

「なに、じょうだん言うの。ボロージャ。」

と、おかあさんは言いました。

「ううん、ちがうよ。ほんとうだよ。」

と、ボロージャはさけびました。

「ほら、あそこ、あそこ。いちばんてっぺんにいる。えだのかげにかくれているんだよ。」

④「おかあさんの顔は、まるでしらかばの幹と同じくらいに白くなりました。」

「アリョーシャは、気が変になったんだ。」

と、ボロージャは言いました。

「だまって。」

⑤「と、おかあさんは、小声できびしく言いました。」

「ボロージャ、あなたはおうちに帰りなさい。」

Ⓐ 小さいアリョーシャが登ったから。

・ボロージャがからかったから、アリョーシャが登ったのだということに責任を感じておびえた顔になつたのだ。

・アリョーシャがあまり高く登ったから。

Ⓑ ボロージャとアリョーシャが兄弟でないことがわかつた。

・二回よんでいるから、何か大へんなことがあった。

Ⓐ ボロージャも心配しているようす。あんなにからかっても、友だち思いのところもある子だ。

Ⓐ まさかアリョーシャが登るとは思わなかつたので、おどろいている。

・きゅうに、そんなことを言われたのでおどろいたようす。

Ⓑ 「どの」というところから、そのへんにしらかばの木が何本もあることがわかる。

Ⓐ 「まさか、……」と思って走つて行つたろう。

・くつなどはかづに飛びだしたのではないか。

・血圧が高ければたおれてしまうだろう。

Ⓐ アリョーシャは、登つてもせいぜいこのへんんだろうと思って見たのだと思う。

Ⓑ ボロージャは、近所でもいじわるの子だからうそを言ったと思って、おかあさんは、こんなことを言ったのだろう。

・アリョーシャは、言うことをよく聞く子だから、のぼりやしないと思って言ったのだ。

・アリョーシャが木に登つたのを信じたくなかつたから言ったのだと思う。

Ⓐ おかあさんのおどろいたようす。

・表現がうまい

・たとえとしては、大げさな言いかただ。

・日本人なら、青くなつたと言うのに、シベリアの人は色白だから、このとき、白くなつたと言うんだろう。

Ⓐ アリョーシャの力では登る気にならないはずだから、気が変になつたと言つたのだ。

・さんざんからかつくせに、気が変になつたなんて言ってごまかしているんだ。

Ⓐ おかあさんは、しんけんになって言つたろう。

Ⓐ おかあさんは、いい考えがりかんだから。

・ボロージャが、ここで大声を出すと、アリョーシャがおどろいて落ちるかもしれないから、こう言ったのだ。

・下から、ふたりして言うと、アリョーシャがおちつかなくなるから。

・アリョーシャのことだけで、ボロージャのことはかまつていられないから。

・おかあさんは、アリョーシャとよく話し合いたいからこう言ったのだ。

・アリョーシャをしかるのをボロージャに見せたくないから。

予想・見通し

・アリョーシャは、おかあさんに見つかったな、と思う。そして、おかあさんは、町の人にてつだつてもらつてアリョーシャをおろす。

- おかあさんは心配しながら、アリョーシャをおろしてやる。
- おかあさんは、「下を見ないで、少しずつおりなさい。」と言っておろしてやるだろう。
- おかあさんのさしつにしたがっており、登るより、おりるほうがむずかしいことが身にしみてわかる。

(中 略)

Ⓐ アリョーシャの顔は、まっかになほてっています。[Ⓑ]ふるえる両手で、ひざについたしらかばの白いくずを、はらい落としました。

見知らぬべっそうの人は、頭をふって言いました。

Ⓑ 「よし、よし。らっかさん兵になれるぞ。」

けれども、おかあさんは、むすこの、細い、赤く日焼けした、ひっかききずだらけの、小さな足をだきしめると、小声で言いました。

Ⓐ 「アリョーシャ。約そくしてちょうたい。もうけっして、こんなにおかあさんを、苦しめないって。」[Ⓑ]

そして、おかあさんは、いきなり大きな声をあげてなきだし、ふり返りもせずに、急いで帰つて行きました。

Ⓐ アリョーシャは、ほっとして顔がまっかになったのだろう。

• きんちょうがほぐれたんだと思う。

• ぶじにおりられたうれしさで顔がほてったのだろう。

Ⓑ 高くのぼったのでこわかったのだろう。

• 心ぞうが、とうとうどきどきしているのでふるえているのだ。

• 力をぜんぶだしておいたので、つかれきっているのだ。

Ⓑ さっきは、あんなにおこって、おどかしたりして、こんどは、ほめたりしてお天気やさんだ。

• 「らっかさん兵」というから、そのころ戦争がはじまっていたのかな。

• さっき、アリョーシャのおかあさんに「ご心配なさらいでください。」と言われたのでほめたのだろう。

Ⓐ おかあさんは、よほど心配していたことがわかる。

• ボロージャに、小声できびしく言った時とは感じがちがう。この声は、半分ぐらいなき声にけされてしまったのではないだろうか。

Ⓑ アリョーシャもきっと、なきだしそうになったろう。

• おかあさんは、アリョーシャが言われたことを守らないで木に登ったことが、悲しかったのだろう。

• ぶじにおりられてよかったですと、うれしなきをしているのだろう。

• おかあさんは、アリョーシャがおりるまでよほど心配だったのだろう。

• おろすとき、やさしく言っていたのはかくしていたのだ。

Ⓐ おかあさんは、前の部分までやさしくしていたのに、ここで急になきだしたりしたのはどうしてだ

うか。

アリョーシャが木のてっぺんにいるのを見たおかあさんが、やさしくしたのは、アリョーシャを落ちつかせるためだったんだ。

そう。今はアリョーシャはおりてきてしまっているし、そんな心配をもうしなくていいから、少し
こうふんして言っているのだ。

いきなり大声をあげてなきだしたのは、今まで、心配していた気持ちが急にとけたためだろう。

予想、見通し

「おかあさん！」とよんでついていく。

おかあさんにあやまる。

家に帰ったおかあさんは、いつまでもないている。アリョーシャは困ってしまう。

ないているおかあさんをなぐさめて、あらためて、もうけっして心配かけないと約そくする。

アリョーシャは、おかあさんにあやまってなみだをふいてやる。

④ 木戸の所には、ボロージャが立っていました。おかあさんは、そのそばを通りすぎると野菜畠を通って、谷の方へ行きました。草の上にこしをおろすと、ネットカチーフで顔をおおいました。

アリョーシャは、どうしてよいかわからずに、ついて行きました。⑤

アリョーシャは、おかあさんとならんで、谷のしゃ面にすわると、おかあさんの手を取り、かみをなでながら言いました。

「ねえ、おかあさん。ね、もうなかないで。ぼく、もう、大きくなるまで、あんな高い所には登らないよ。ね、もうなかないで。」

アリョーシャは、おかあさんがなくのを、初めて見たのでした。

④ボロージャは、今までのようすを見ていたのだろう。

・ボロージャは、あの時、アリョーシャのおかあさんに「帰りなさい。」と言われても、心配で帰れなかつたのだ。ボロージャも友だち思いのところがある。

・ボロージャは、アリョーシャをからかつたのを後かいしているのだろう。

⑤おかあさんは、ないている顔を子どもに見せたくなかつたんだ。

⑥わたしたちは、ふつう親をなぐさめたりしない。この本では、はんたいだ。

・アリョーシャは、おかあさんをよほどかわいそうだと思ったろう。

・アリョーシャは親おもい。

・アリョーシャは、やさしい心を持っている。

⑦前の時間、「……やくそくしてちょうだい。」のやくそくをした。

・こんなに心配していたおかあさんを知って、やくそくをぜつたいた守るのだろう。

・アリョーシャは、強く反省している。

⑧おかあさんが初めてなくなんて、そうとう悲しかつたのだろう。

・おかあさんは、アリョーシャが木のてっぺんまでのぼったのがそうとラシックだったのだろう。

- おかあさんがはじめてないたのだから、アリ・ーシャは今まで大きな心配をかけたことがなくこんどがはじめてなのだろう。
- アリ・ーシャのおかあさんは、よほど悲しいときでなければなければならないのだ。がまんづよい人だなあ。
- やがて、アリ・ーシャは、親思いの子になるだろう。

四まとめ

- ①とくに、予想・見通しをたてさせると、児童の興味・関心は高まり、意欲的に学習するようになつた。
- ②次の「予想・見通し」をたてたり、「感想・意見だし」をするには、文章の表現をふまえた読みとりをしてないと、それらがまちがったり、あいまいになつたりするので、文章を正しく読みとることをおろそかにしないようになる。
- ③文章全体を読まないでも「感想・意見だし」をすることができ、読みすすめるにしたがい修正したり、添加したりして、作品の基本思想に迫ったり、とらえたり、文章全体の情調をとらえたりできるようになる。
- ④「感想・意見だし」は児童ひとりひとりの能力に応じたものが出され、集団思考の場で検討されたりする。
- ⑤読み進める中で出される「感想・意見だし」は、やがて、感想文を書くことに通ずるものもある。